第３節　情報担当教員への面接調査の結果

今回の面接調査の対象には、病弱養護学校本校の担当者も含まれている。この学校は、独立した校舎を持たず、小児専門病院の建物内に設置されているため、環境的には院内学級に非常に近いといえる。

１．ICT 環境

（１）パソコン

どこにおいても、ユーザ数（児童生徒及び教員）に対するパソコンの絶対数が不足しているという訴えがあった。学校割り当ての PC が「分教室」にまで回ってこないため、独立予算の「分校」分６台から３台回してもらったという分教室やベルマーク財団や企業から寄贈されたパソコンを、児童生徒用のインターネット端末としている学級もあった。

教務用として支給されているパソコンの台数が充分でないため、職員室で教員が教材作成や事務処理に使っているパソコンは、私物の持ち込みであるケースが多かった。児童生徒用のインターネット端末は、授業での使用が優先となっているが、教員が空き時間に事務処理で使用することも多く、調整が必要になるというケースもあった。

教室数が１あるいは２という小規模のケースでは、教室の一角にインターネット端末のパソコンが設置されていた。特別教室がある分教室等では、放送室、PC ルームに置かれていた。ノートパソコンは、職員室や PC ルームに保管されていた。

ＰＣルームは狭く、車椅子の出入りが困難なため、授業で活用しにくいというケースがあった。

クライアント１台ずつ小、中・高各教室にある分教室では、「授業の流れで必要な時にさっとインターネットを使って調べることができる。情報が早く手に入る」というメリットを挙げていた。

ノートパソコンは、ベッドサイド学習用として活用されている。ただし、「古い機種なので、起動に５分ほどかかり、ベッドサイド授業で使いづらい」という訴えもあった。ある学級では、長年の要望がやっとかない最新のノート PC が備品として届く予定ということであった。

備品としてのパソコンは古いものが多い。中には教員が必要なハード費用を自己負担してなんとか維持しているというケースもあった。

インターネット接続に対応できない古い機種のパソコンは、ゲームや描画用としてスタンドアロンで使用されていた。

（２）インターネット回線

接続環境は、以下の通りであった。

・ 2001 年 ADSL 常時接続（それ以前は未接続）が 3 件
・ 2001 年 CATV 常時接続（それ以前は未接続）が 1 件　この学級では、2000 年に企業からデスクトップパソコンの寄贈を受けたことがソフトな圧力となり、教育委員会がインターネット接続に動いたという経緯がある。
・ 2002 年 ADSL 常時接続（それ以前は ISDN）が 2 件

高速及び常時接続環境が整ったのは、ここ 1,２年のことである。

多くのケースがインターネット回線施設後、LAN の構築に着手した。しかし、2003 年夏の時点で、まだ調整中のところもあった。その中には、「OS が混在しているためかネットワークに支障が生じ、その解決および対策は非常に困難」というケースもあった。

有線 LAN の導入が多く、無線 LAN を導入しているケースは１件のみであった。

在籍児童生徒の疾病の性質上、際立って影響を受ける医療機器が周辺に無い分教室では無線 LAN を導入していた。職員室にアンテナを立てており、職員室　プレイルーム　PC 室、職員室の真上の教室でインターネットが使用可能となっている。しかし、無線が不安定になることがあるため事務用は有線にしている。

各学級とも職員室や放送室に回線のもとが来ており、そこから天井にケーブルを這わせる等して、教室に分岐している。しかし、隣接している教室とは異なり、職員室とは離れた棟に教室がある場合、そこまでケーブルを延長することができないというケースが２件あった。

・ 一部の教室が、職員室のある建物から数百メートル離れており、LAN ケーブルを延長するのは困難。インターネットを学習に活用できそうな児童生徒が在籍するのは年に数名と少なく、そう長期にわたる入院でもないので、これまで強いニーズがなかった。しかし、自宅でバリバリ使っていた児童もかつて在籍していた。もしインターネット回線がつながっていれば、彼は学級でもいろいろ活用していただろう。今後、その教室へのインターネット接続の要望を出したい。

・ 職員室から離れた教室にはインターネット回線がきていない。この教室は病院敷地内とはいえ、職員室のある建物からかなり離れた病棟にある。古い機種のパソコンを設置し、スタンドアロンとして使っている。

（３）運営担当者・部門

「視聴覚パソコン係」「パソコン部」「情報教育部」等の名称で複数の担当者を置いている場合とスキルのある教員が一人で担当している場合、「特に担当を決めず、トラブルの対処を週 2 回来級するスキルのある講師の先生にお願いしている」という場合があった。

（４）情報教育アドバイザ

情報教育アドバイザ（「IT 専門家」とも呼ばれている）は、派遣されている場合とされていない場合があった。

アドバイザが来ているところでは、教員の研修や LAN 構築作業をお願いしていた。分教室には来ていないが本校に来ているアドバイザに Web ページ作成の協力を依頼したケースもあった。

問題点として、同じ人に継続して来てもらえない、得手不得手があって、必ずしもこちらの要望に応えるスキルを有していないなどが挙げられた。

アドバイザの派遣されていない学級では、教員の研修は、必要に応じて地域人材センターから派遣をお願いして講習会を持っていた。

２．児童生徒の活用状況

（１）授業での活用

- 主に総合的な学習の時間での調べ学習
- 中学部は技術の授業で使用
- 各新聞社のサイトから記事を読み比べる。（メディアリテラシー教育に活用）

ベッドサイド授業でのノートパソコン活用

- ＤＶＤ鑑賞
- 重複障害児童・生徒の「見る・聞く」の授業で、母親の画像を注目させ、スイッチで名前の呼びかけ音声が出る仕掛け　パワーポイントで紙芝居など作成して、より画面の変化や音声など教材に幅を持たせる工夫もしている。入力装置としてジョイスティックを使用。

（２）休み時間の端末使用

「許可している」場合と「許可していない」場合とがあった。

「許可している」

- 休み時間に自由にネット検索
- ゲーム（授業時間中はゲームをやらない約束になっている。）
- 教員が必ず教室にいるので、子どもだけで PC にさわっていることはい。

「許可していない」理由として

- 整形外科疾患の児童生徒が使用するには PC ルームが狭く移動が危険

（３）情報モラル

ある分教室では、以下のような取り組みをしている。

- 「生徒のパソコン利用について－中学生用－」文書化した約束を掲示
- 改めてそのための時間は取らないが、活用している場面、場面で注意をしたり使用上のルールを説明したりしている。

３．コミュニケーションにおける活用

- 生徒が外泊や一時退院の期間中、学習の継続のサポートをメールで行うケースも多い。課題を出したり、アドバイスをしたりしている。自宅での普及率は高くなっている。インターネット未接続の家庭もあるので、通信環境によって FAX や郵送、電話連絡を併用。
- 退院後の相談窓口としてメールが活用されている。
- OB,OG 対象の掲示板の開設も考えてはいるが、参加者が亡くなった場合等、対応が難しく今のところ棚上げとなっている。
- 前籍校とのやりとりで E メールを使ったケースはあるが、あまり多くの事例はない。

４．教員の活用状況

（１）使用内容

- パソコンを頻繁に活用する教員は、個人持ちのパソコンを職員室の机上で LAN に接続して使用しているケースが多い。
- 以前は掲示物の作成等が主だったが、「授業にも使いたい」という教員が増えてきた。
- ビデオ編集

（２）ファイルの共有、個人情報の扱いについて

- ファイルの共有はしていない
- ネットにつないでいない PC２台を教務用で使っている。
- 職員室の PC は教務用で基本的には授業に使用せず、共有ファイルを用いて作業の効率化を図っている。セキュリティ面から個人データに関するものは全て CD-RW で別管理し、HDD には入れない。

５．情報発信

- 本校の枠の中で５M しか割り当てがないため、画像をふんだんに取り入れるのが困難。
- 肖像権に関しては保護者会で説明している。画像は遠景や背後からのものに限定している。しかし、それでも困るというケースが数名あり、その児童生徒の画像は使わない。
- ４月以降の転入の場合は、手続き時に教頭からそれぞれの保護者に説明している。
- 紙媒体の学校案内には障害、病類別人数などを記載しているが、Web ページには載せ

ないことにした。(誰が閲覧するか分からないので)

- ホームページ作成委員会があり、分教室として１名の委員が参加。
- Web サイトには、本校の mail アドレスを公開
- 分教室のアドレスは非公開（Web を見ての問い合わせ mail に対応する体制が、分教室内にできていない。）
- 学校のアドレスは公文書専用であり、児童生徒が使えるようにはなっていない。また、ＨＰに掲載しているメールアドレスについても児童・生徒が使用することはない。
- ヤフーあるいは goo などで簡単にフリーのアドレスが取得できるので、そのようにしてほしいと授業を担当する教員に伝えている。フリーのアドレスを取得させておくことで退院後もその個人のアドレスを利用できる。

６．改善したい問題点

（１）パソコンの台数、機種

- ユーザ数に対する機器の絶対数が不足している。→適切な台数の支給を望む。
- 学校の授業以外で ICT 支援機器を利用できない。
- 教員１人１台の端末を支給して欲しい。(週末は週案作成のため PC の使用が集中し業務に支障が生じる。)
- 機器の老朽化　ノート PC は７年目のものでありベッドサイドで使用することもあるが限界である。
- 予算が少ないので今の時代の技術革新の速さに対応できない。→毎年１台でも新機種が入ると時代にあった活用が可能になる。

（２）接続環境

- 一番必要としている病棟にインターネット接続環境がない。しかし、病院内という環境のため、自由に配線できない。→病棟新築工事に伴い、病棟に回線を引いてもらえるよう要望を出している。
- 隔離されている児童生徒には ICT 支援がよりいっそう必要なのに、感染の管理が上がると機材の持ち込みがほとんどできない。
- 病室にインターネット回線が欲しい。結核の児童生徒の場合、入院して８週間隔離となり教員が病室に入ることさえ許可されない。添削というかたちで学習の支援は行っているが、ネット回線でテレビ電話ができれば、よりよい教育ができるはずだ。

（３）運用

- 機器のメンテナンス　授業中のトラブル対処　引き継ぎに不安を感じている。
- 情報機器のメンテナンスは教員の仕事ではないと考える。ただし、利用・活用している教員がパソコンや LAN についてまったく知らないというのは困る。

→専任の担当者がメンテナンスを行うシステムにして欲しい。

- サポートできる人が近くにいない。病院内のボランティアさんやスタッフの方々の中に、PC 関係に詳しい人がほとんどいない。
- 機器のメンテナンス　現在デスクトップ 1 台が起動しない状態にあるが、どこに修理を依頼したらいいのか分からない。本校のスキルの高い先生にメンテナンス等お願いしたいが、忙しい業務の中で院内学級まで来てもらうのは申し訳なく感じ、頼みづらい。

（4）教員の意識

- 教員の著作権に関する意識に多少問題がある。（どの担当者も指摘）
- 教員のセキュリティ管理に関する意識が低い。
- 「ICT」の「C」の部分で使用している教員がいない。LAN を活用して「情報をやり取りする」という部分において、教員がまだまだ経験不足。

7．理想的な環境

- 光接続　病棟の居室まで回線がいきわたり、カメラ付き端末で TV カンファレンスができるようになること。
- 情報モラルやネチケット等の指導やフィルタリングなどがしっかりなされているという前提で、24 時間いつでも利用できるといい。児童生徒が何か思いついたとき、言いたいことができたとき、返事が早くほしいとき、すぐ利用できるような環境が理想。
- 「どう調べていけばよいのか」情報を活用する上でのアドバイザリースタッフが必要。専任で置くのは無理なので、そういう観点をもった教員向け研修内容をおくことが必要なのではないか。

8．その他の提言

- 高等部の無いところでは、その年齢の生徒に対応できていない。インターネットを活用して何かフォローはできないか。
- 「長期にわたって重大な疾患で入院している子供たちが、ネットを使ったコミュニケーションを利用して病気に立ち向かおうとする力とか生きる力というようなものを身につけた。」という話を新聞や雑誌などで見ることはあるが、学校としてそれを研究した実践報告が普及していない。実際に授業のかかわりとして行った場合のメリット、デメリット、工夫などのノウハウを現在探している。
- 教師として最低限必要な知識・技能とは？そして、特殊教育（特別支援教育）に携わるものとしては？さらに、病弱養護学校や院内学級を担当する教師なら・・・？かなり専門的な知識や技能も必要。

- 校内に限らず、すぐにサポートできるような教員側のネットワークが必要。
- 学校の情報教育部は、このような知識や技能を向上させるための研修や情報提供、さらに校内の人的なネットワーク作りも大きな役目になると思う。
- 情報教育部としての「メンテナンス係」は、こういったネットワーク環境を維持・活用する上で必要な設定や機器の復旧作業といったことは仕事の内に入ると考える。「支援機器活用係」「情報発信担当係」「研修係」「消耗品等管理係」等に分かれていると、よいのだが現実には人が足りない。
- 自由に外出出来る機会も少なく、また外泊もなかなか定期的にできない児童生徒もいることから、インターネット等の情報通信ネットワークの利用を通して、必要な情報をより手軽に取得できることは重要だと思う。しかし、そのためにはより分かりやすい操作性、より高性能な機器の導入がはかられることが必要。
- 必要以上に略した用語を使ったり、カタカナ語を使ったりしないことも重要。（CPUと言うよりも中央演算装置と漢字で表記した方が、機能が分かりやすい。）
- 情報通信の発達は、日進月歩でめまぐるしく進歩し、情報の氾濫はかつてない膨大なものとなる中、必要な情報をより適切な形で児童生徒に示すことができる技術（知識）がますます求められていくのだろう。